



盲目の天才折り紙作家 加瀬三郎 心の旅

「わたしは折り紙が大好きです。いつも折り紙のことを考えているので頭の中にもツルがちゃんと二匹います。ツルツル！」 そう言いながら帽子を脱いだ加瀬三郎さん、ユーモアたっぷりに頭をさげると会場は大爆笑！！

「はい、はじめますよ。第一の三角。次にもう一つの三角。できましたか？」

集まった生徒たちが加藤さんの親切な指示にしたがって色紙を折り始めると、みるみるうちにキツネ、クジャク、野球帽などが出来上がり、子供たちは目を輝かす。一枚の色紙から思い買えないものが生まれる驚きと、様々な形を作る喜びを子供達に知らせ、心を通じあわせる。加藤さんにこれ以上の望みはない。その望みだけのため62歳の加瀬さんは写真家の田島栄次さんと二人三脚でアメリカ、キューバ、ソビエト、バングラディッシュ、インドなどへ出かけて行った。



田島さんの役割は、出かけていく国の先々で通訳をし、折り紙を手伝い、写真を撮り、そして、特に加藤さんの目になること。加藤さんは全盲で不自由なのである。小学校の頃、左の眼はまだ幾らか自由であった。近所の小川で掬えたザリガニや魚の色も形も昨日のこのように思い出せる。しかし、やがて左の眼も光を感じなくなってしまった。折り紙に初めて挑戦したのは29歳。ザリガニを折ってみた。母にも教わったことがないので自分で考えだすしかない。指先に心を集め、折り線を確認しつつ、折っては壊し、折っては破る日々が続いた。花でも動物でも触れるものは全部片っ端から写生するつもりで折ってみる。指の油は色紙に吸いとられてカサカサになってしまった。信じられないほどの努力だった。こうして折り紙を作る喜びを覚えた加藤さんは、その喜びを人にも分けたいと思うようになっていった。「人が喜べば、自分の喜びは二倍になってかえってくるから」 こう語る加藤さんの表情はいつも生き生きとしている。

障害者センター（南米エクアドル）で大喜びの子供たち

1988年、アンデスを越えた。加藤さんは山あいにある小学校、養護施設、在留邦人の集いでも、薄い空気の中で全盲とは思えない身軽さで折り流に多忙なスケジュールをこなした。手を取ってツルの折り方を教えてもらったエクアドルの子供たちの心にも夢がふくらんだ。言葉は通じなくても、身体に不自由があっても、心を通わせあうことはできる。折り紙を通じて世界中の人々と喜びあうことができる。世界を一つにする愛と平和への願いを育てることができる。

加瀬さんは、この未来への明るい夢を折りだすために自らが「折り紙大使」となり、人生の紙飛行機に乗って世界の空を羽ばたいたのです。

（田島栄次著 折り紙の詩 集英社 1997年発行）



東京ビッグサイトの「ハムフェア」会場にて（1998年）左から田島栄次・加瀬三郎・尾崎一夫・久子・アンマリ

サタデー・トーク

バイブル・トーク

きき手 尾崎一夫 毎週土曜日放送		淀橋教会 峯野龍弘主管牧師 毎週日曜日放送	
6月06日	折り紙の詩（1）	6月07日	聖書遊覧バス（14）
6月13日	マリンバの調べ	6月14日	リスナーからのお便り交換
6月20日	南米ふれあいの旅	6月21日	聖書遊覧バス（15）
6月27日	サボテン便り（10）	6月28日	聖書遊覧バス（16）

放送後の番組は、ホームページ(<http://japanese.reachbeyond.jp>)のトップページ左側メニューにある『インターネット放送』のリンクページからお聴きいただけます。（mp3形式）

放送時間：日本時間 午前7時半~8時 15410kHz （再放送）午後8時~8時30分 15.565kHz
（米国アリゾナ州制作/オーストラリア送信）

*受信報告書をメールで送る場合： hcjbjapan.office@gmail.com

